語彙を中心とした中国語中級テキスト作成に関する研究序説

――学習者にとって必要な語彙情報は何か――

浅　野　雅　樹

目　次

1　はじめに
2　テキストに対する調査
2-1　既存のテキストのスタイルについて
2-2　テキストにおける語彙情報の提示について
3　日本人学習者にとって必要な語彙論的知識は何か
3-1　語形
3-2　語義
3-3　常用語と特殊語彙
3-4　熟語
3-5　語と語の関係について
4　日本語語彙との関係に依拠した考察
4-1　日本語語彙との関係による語彙分類を利用する
4-2　文化義を示す
4-3　日本における中国語の使用に応じた語彙の提示
5　まとめ

1　はじめに

中国語学習の一つの特徴として、とりわけ中級レベル以上では文法と語彙の境界線の明確性が薄れる、ということがよく言われる。胡 1997 より中国語教育全般において、語彙の重要性が提言されて以来、文法や発音と同様、語彙教育の新しい方法や、従来使用されていた方法の改善点などがよく指摘される。日本人の中国語学習者による作文に対してのある調査では語彙の誤りが約 80％に達するという指摘もあり[1)]、漢字の知識を有する日本人にとっても語彙学習の重要性は伺える。中国の対外漢語教育界においては、“汉语水平词汇与汉字等级大纲”が 1992 年に公刊され（2001 年に修正）[2)]、学習者が学ぶべき 8822 語が、「甲乙丙丁」の四段階に分けて定められた。日本の教育界においても、中国語教育学会作成の『中国語教育のガイドライン』には初級レベルの学習者用の 1000 語が定められている。

大学における外国語教育については、授業で使用するテキストが重要な役割を果たすということは言うまでもない。テキスト作成の際はそれぞれのレベルでどのような語を導入し、提示すればよいのかということが問題となる。近年の一つの傾向として、このようなガイドラインに基づき選定されるようになったという変化が見受けられる。ただ、実際の教育現場において、このことが教員にどれだけ意識されているのか。また実際にどの程度の教育効果が得られているのか、といったことを考案すると、以前と比べて、大きな変化が認められるとは断言できない。今後の課題の一つとして、テキストにおける語彙情報を活性化させ、教育全般において、学習者がより効率的に語彙学習できるための工夫が必要である。

本稿はこのような中国語教育における語彙の扱い方の現状を踏まえた上で、主に大学の授業で使用する語彙を中心とした外国語授業用の中級レベル[3)]テキストの作成することを目的に、語彙教育について初歩的な考察を行うものである。

2　テキストに対する調査

2-1　既存のテキストのスタイルについて

筆者は、すでに出版されている中級レベルの学習者を対象とした大学授業用のテキスト 15 部[4)]について、語彙に関する内容がどのようにテキスト内に示されているのか調査した。中級レベルのテキストの編成については、課文（課文は「会話体」と「文章」の二つのタイプがある）があり、その中に出てくる語句に対する語釈が「単語」或いは「語注」といった形[5)]で付される。さらに「ポイント」或いは「要点」として、いくつかの学習項目を提示し、最後に練習問題というのが一般的なスタイルである。テキストにおいて、語彙がどのように提示されるのかという点を考察すると、テキスト課文に出てきた語を「単語」或いは「語注」という項目で順に羅列し、ピンインと意味を表記するのが一般的である[6)]。最近出版されているテキストでは、これらに日本語訳も付すものが増えてきている。

また、「ポイント」の部分では、「様態補語」、「存現文」といった文法事項が示される他、本文において使用されている単語（“既然”、“只好”、“像”、“一点儿”、“越来越”、“叫做”、“觉得”といった語が多く見られる。）をそのままポイントの項目として提示し、その下に、その語句を含んだ用例文をいくつか示すテキストが多い。一部のテキストでは、語彙論における類義語、接辞、日中同形異義語などの知識が応用されているものも見られる。しかし、全体的にこれらの語彙論に関する事項を示すものは少なく、一部のテキストにおいては全く触れられていないことがわかった。

2-2　テキストにおける語彙情報の提示について

調査した中で、語彙学習と語彙の定着のために記されている内容が詳細、かつ多様であるテキストを以下、三部挙げる。

・『グループ方式で学ぶ中国語中級編―日本と中国』（石原享一他著、東方書店）

テキストにおける各課に「比較文化クイズ」という項目が設けられており、一部の課ではこの箇所において、語彙に関する様々な情報が記されている。これらは、すべて問題形式で示されているが、その題材として日中同形異義語、流行語・新語、外来語（音訳語）、ことわざ・成語、派生語、固有名詞などの語彙についての知識が応用されている。

・『中国見たり聞いたり 15 章―美紀の北京再訪』（荒川清秀他著、光生館）

テキストにおける各課に「比較」という項目が設けられ、その中で語義が近い 2 ～ 4 つの語が 1 組とされ、2 ～ 3 組示されている。さらにそれらの語の下には、その語を含んだ用例文が提示されている。これは類義語の区別を学習者に知らしめることが意図されているものと見なせる。その他、各課で「词句」という項目が設けられ、一つの語とその語を含んだいくつかの用例文が示されている。これは、その語に関する意味項や文法的機能、形態素といった語彙論的知識が教授されることが意図されているものと見なせる。また本テキストでは、課文に対する語釈や語注といった項目は設けられていない点が特徴的であると言える。

・『焦点中国』（植屋高史他著、白帝社）

各課の本文に出てきた単語の解説が「語句のヒント」という項目の中で示されている。この中には語義の他、文法機能やコロケーション、文体等が示されており、説明が詳細である。また各課の最後の部分で、本文に出てきた重要な語を語彙表の形（表には語、ピンイン、品詞、日本語訳、用例、新 HSK の基準が示される）で提示し、付属の CD を聞きながら、その語と、その語が用いられる用例の部分を書かせるというタスクが設けられている。

調査したテキストにおいて注視できる内容としては、さらに、単語に関する意味やピンインすべてを提示するのではなく、一部を空欄にして、テキストの使用者自身に記入させるワーク形式が用いられているもの。また、コラムにおいて、語彙に関する新語や日中同形異義語、類義語、方言語彙を紹介し、学習者に対して語彙学習の必要性と面白みを意識させる工夫がなされているものも見られる。

3　日本人学習者にとって必要な語彙論的知識は何か

ここでは、日本人の中国語学習者に対して、語彙論における知識や情報をより豊富に、またより詳細に教育内容に加え、その上でテキストにおいて提示することを考えた場合、有用性があると思われる事項を挙げる[7)]。

3-1　語形

①“语素”「形態素」について

言語の最少単位は単語であるが、さらに意味を持つ最少単位の形態素がある。その中でも特にそれ自身が単語となることができず、他の形態素と結合してはじめて単語となる附属形態素は、日本人学習者にとって重要な学習事項である。例を挙げると、“服”、“夏”、“男”、“耳”などは附属形態素であると見なせる。ただ、これらは日本語においては単語であり、“*我去买服。”「私は服を買いに行きます。」、“*夏来了。”「夏が来ました。」、“*那儿有一个男。”「あそこに男がいる。」、“*我耳疼。”「私は耳が痛い。」といった誤りが学習者によく見られる。このタイプの誤りを防ぐには、このような個別の例の他、学習者に形態素全般について教育をする必要があると言える[8)]。

②語構成について

中国語の語構成については、語彙論の観点から様々な事項が挙げられる。管見では既存の大学授業用のテキストで、これらについて言及しているものはほとんど見られない。しかし、中級レベルの学習者にとって、合成語の語構成と接辞についてはとりわけ重要であると思われる。合成語の語構成については、一般的に「並列型（“美丽”、“寒冷”など)」、「修飾型（“绿茶”、“热心”など)」、「主述型（“日出”、“年轻”など)」、「述目型（“司机”、“见面”、“来客”など)」、「補足型（“提高”、“书本”など)」、「重ね型」（“姐姐”“刚刚”など)、「付加型」などがある。テキストにおける「単語」や「語注」の部分において、すべての単語にこれらの語構成の型を示す必要まではない。ただ、中国語では語構成がそのまま句（連語）や文の構成となるという点を考慮に入れれば[9)]、学習者にこれらの語構成のタイプを認識させることは、同時に文法範疇における様々な要点に対する理解にも繋がるという効果が見込める。

例えば、「述目型」について述べると、“见面”は“见了三次面”や“见过面”というように間にある成分を挿入できる離合詞である。日本人学習者にとって、この離合詞は難点の一つであるが、離合詞のほとんどは、この「述目型」の語構成を持つものであるということと結び付けて学習させることが可能である。また“来客”、“出事”などは述目型の一類の単語である、という認識を持つことは、“我家来了三个客人。”、“最近出了很多事。”などの所謂存現文の理解につながることが考えられる。

最後に挙げた「付加型」の語はやや特殊な語構成をもつものである。特に日本語の語彙にはない接頭辞の“老”、“阿”、接尾辞の“儿”、“头”、“子”などは接辞の概念とともに、テキストのある箇所にまとめて提示するのが効果的であると思われる。例えば、“木头”、“石头”、“想头”、“甜头”、“苦头”という五つの単語を覚えるのに、その中の“头”が接尾辞であるという理解は有益である。つまり“头”がある一定の名詞に付くことや、他の品詞を名詞化する役割があることを知っているか否かによって、単語学習の面での学習者の負担感が変わり、定着度にも差が見られるであろう。[10)]

3-2　語義

①周辺義

語には概念義や指示物に関する客観的な意味を示す基本義の他、さらに語の周辺に様々な意味が認められる。（本稿ではこれを「周辺義」と称す。）既存のテキストにおける「単語」や「語注」などの箇所では、語の日本語訳が付されるものが多いことは前述した。ただ、それは基本義だけを示すものが大多数である。2 章で示したように、詳細に周辺義までを記すテキストは一部見受けられるが、ほとんどのテキストにおいては周辺義までは記されていない。このような語義の示し方は、課文の読解に対して補助的な役割を担うものである。ただ、学習者はこれにより、

語に対する全体の理解ができるわけではない。語彙自体の習得や定着を図り、とりわけ発信語彙[11]としての語彙量を増やすためには、なるべく多くの周辺義を示す必要があると言える。誤用を防ぐという観点からすれば、特に日本語の語彙と同形ではあるが、周辺義が日中で異なる語については、明記すべきであろう。周辺義にもいろいろあるが、具体的に述べると、一般的に“告诉”が日常的であり、“通知”は公式の場で使用される。また“制造”は多くの場合、悪い意味を示すが、同じような意味の“生产”についてはそうではなく、中性的である、といった褒貶義などの感情義。 さらに“进”は口語的であり、“入”は書面語的である、といった文体に関しては学習者が語感や偶発的学習により習得するという可能性は低く、テキストにおいて明示するのが効果的であると考えられる。

これらの周辺義の他、文化義がある。例えば“猫”や“狗”といった動物について。“猫”は西洋においては悪い意味で使用されることが多いが、中国ではそのようなことがない。ただ“狗”に関しては「へつらう人の形容」として悪い意味で使われることが多いといった点。また色彩について、“红色”は「縁起がよい」「革命的」であるということ。数字については“八”は音の近さから「お金儲け」という意味で認知され「縁起がよい」数字であるといったこと。また食べ物について、“饺子”「ギョウザ」は年越しに食べる習慣があることや、また一緒に作ることは「一家団欒」「親しみ」の象徴である、といったことなどが挙げられる。これらの文化義についても語彙学習における重要な要素であることは言うまでもない。

② 多義語

まず学習者に、語には単義語と多義語があるが、大多数の語は多義語であることを理解させることが必要である。多義語に関して、詳細を記し、一つの語は一般的に複数の意味をもつ、といった内容の表記があるテキストは非常に少ない。

一部の中級レベルのテキストでは、ある語について、課文に出てきた語義のみならず、その語の他の語義についても示されている。ただ全般的に見れば、例えば“这个行李很轻。”「この荷物は軽いです。」という課文に対して、「単語」或いは「語注」といった箇所で、「“轻” －qīng－ 軽い」とだけ記すテキストが多い。つまり「(一つの語) －（ピンイン）－課文に相当する一つの語義」の形で示されるスタイルがほとんどである。ただ、このように「“轻” －qīng－軽い」とだけ記されていると、学習者は当然“轻”の「若い」、「慎重に（そっと)」、「重要でない」といったその他の語義は認識できない。このような状況で、後に“轻拿轻放”といったフレーズを「リーディング」もしくは「リスニング」をした場合、「軽いモノを持って、軽いモノを置く」というような誤った解釈をしてしまう可能性が高い。

また日本語の単語との関係から一点注視すべきことがある。日中同形語で、日本語では「A」という語義しか持たないが、中国語には「A」「B」という二つの語義がある場合は、日本人学習者は必然的に「A」の語義の方で解釈をする傾向が伺える。“研究”という語を例にすると、中国語の“研究”には「研究（する)」という語義の他、「検討（する)」という語義がある。テキストにおける初出の段階で、中国語の“研究”には「研究（する)」と「検討（する)」という語義があることを学習しなければ、“你对我们要求的事情,我们研究研究。”に対して、「あなたが要求したことは、我々はちょっと研究します」と誤訳されてしまう可能性は非常に高い。課文に出てきた新出語句ということで機械的に“研究－yánjiū－ 研究（する)”とだけ表記するという方法は、学習者の全般的な語彙学習にとってはマイナスの影響をもたらす面があるということを懸念しなければならない。

テキスト全体の構成や、課文の読解のために、ある語が初出の場合、課文の語義だけを示し、後の課における課文で、もしその他の語義が出てきた場合に、その都度示す方法も一定の効果はある。ただ、上述したようなことを考えると、“轻”の「(重さが）軽い」以外の「若い」、「慎重に（そっと)」、「重要でない」のような常用される語義は、同時に付す方法が望ましいことが考えられる。

3-3 常用語と特殊語彙

前述した通り、中国語教育学会編の初級段階学習指導ガイドラインにおける語彙表では、初級レベルの学習者が習得すべき語彙として 1000 語が提示されている。この中で提示されているものは、基本語彙や常用語彙が中心であり、外来語、省略語、古語、方言語、新語、専門用語などの所謂特殊語彙はほとんど収録されていない[12]。ただ中

国語語彙の全容を観察すると、常用語彙とされるものの他に、特殊語彙が比較的高い割合で使用される状況が伺える。したがって学習者は初級レベルの段階では触れることのなかったこれらの特殊語彙を、中級レベルに達する頃から徐々に触れ、習得していかなければならない。既存のテキストでは、これらの特殊語彙について、例えば「此－これ（文語)」、「可口可乐－コカコーラ（外来語)」、「大四－大学四年生（省略語)」といったように、「単語」や「語注」で簡単に表記しているだけのものがほとんどである。ただ、このような表記だけでは、学習者にこれらの特殊語彙の存在を正確に理解させることは難しいと見なせる。したがって、中級レベルの学習者に対する教育内容として、これら特殊語彙の概念や使用状況を説明した上で、学習者にこれらの存在を認識させることが必要となる。また、特殊語彙の意義と特徴を学習者に教えることにより、学習者は中国語の語彙の多様性が認識できると言える。このためには、テキストにおいて、各課におけるポイントの箇所でこれらの特殊語彙を挙げて、ある程度詳細な説明を記し、さらに用例を幾つか提示するのが最も効果的であると思われる。

テキストにおいて取り上げるべき特殊語彙としては次のようなものが挙げられる。

①古語と新語

古語は現代中国語では使われなくなった語を指すが、中には“之”、“此”、“勿”、“谓”、“以”など現在でも書面語ではよく使用されるものがある。これらは口語に使用されることは非常に少ないが、新聞などのややフォーマルな文体においては、その使用頻度は決して低いものではない。テキストにおいて、これらの語を提示する際には、このような特徴を記すと同時に、“之(的)”、“此(这)”、“勿(别)”、“谓(说)”、“以(用)”というように現代語との対応関係についても理解させるのが効果的である。一方、新語についても中級レベルの学習者にとって、重要な学習事項であることは言うまでもない。“微薄”、“蚁族”、“裸婚”といった新語は、非常に使用頻度が高い上、中国社会や経済の諸相を理解するキーワードとなる語と見なせる[13]。しかしながら、これらの新語は、一般的な学習者が持つ辞典には収録されていないことが多い。その分、テキストにおいて、より多くものを取り入れる必要性が認められる。新語については、一時を経過するとすぐに死語となってしまう可能性、また同じ意味を示す語形が複数共存するという状況。さらに使用され始めた当時と語義が変化するということが多々ある。テキストの作成者はこれらのことに注意を払い、普遍性と定着度を的確に見極めた上でテキストに取り入れなければならない[14]。

②外来語

日本語における外来語はカタカナで表記されるが、中国語では音を示す文字形式がなく、外来語も漢字で表記される。したがって、日本人の中国語学習者は、どの語が外来語なのかということを普通は直感的に判別できない。中国語における外来語は音訳されることが多く[15]、その場合、使用される漢字は当て字であるという知識は学習者に教える必要がある。特に、“澳大利亚”や“奥巴马”などの人名や地名については、学習者の立場から見て、これは音訳語で漢字は当て字であるという知識があるか否かで、習得度と定着度には大きな差が生じるものと見られる。その他、“DVD”、“AA 制”、“U 盘”、“卡拉 OK”などローマ字を使用した外来語の存在や、19 世紀の後期に、日本から中国に伝わったとされる“主观”、“民主”、“物理”、“方针”、“化学”などの科学用語の存在を学習者に教えることが検討できる。後者については、「日本語と中国語の語彙において同形同義のものは、19 世紀後期に日本人によって造られた科学用語（日常語彙に対して）に多い。」という知識が学習者の語彙習得や語彙全体の体系的な理解において、ある一定の作用がもたらされることを期待できる。

③省略語

音節数が多い語については、その煩瑣さが嫌われ、音節数を少なくした形の省略語が定着し一般化することが多い。中国語の語彙の中では、この省略語の存在を無視することはできない。省略語にも様々なタイプがある。その中でも、“春运”、“中共”、“流感”、“博导”、“高考”のように日本人学習者にとっては語形からは全く意味が類推できず、また省略語であるということも認識できない語で、且つ常用される語についてはテキストにおいて何らかの形で表記すべきである。また、日本人学習者が誤解しやすい、“高校”、“科研”、“外长”、“初中”、“十一”などは原形とともに示した方が理解しやすく、誤用を防ぐ役割を果たすことが期待できる。また省略の方法は一般的に語義が認知できる範囲で、二音節に省略されることが多いこと。さらに中国の社会や文化に対する理解と同時に学習する必要がある“三好”、“四旧”、“五岳”、“军训”、“环保”、“世博会”などの語もテキ

ストにおいて提示し、解説を加える必要性がある。

3-4　熟語

語形から見ると、複数の語が結びつく連語であるが、結び付きが非常に固定的であり、一つの語のような機能を果たす熟語と呼ばれる一類の語群がある。また、語義の面から見ると、熟語を構成する語の字面の意味が失われ、総体的な意味を示すという特徴がある。漢字に対しての知識がある日本人学習者にとっては“拍马屁”、“开夜车”、“狼吞虎咽”といった熟語をそのまま語の字面の意味で捉え、これらの熟語を含んだ文を全く異なった意味で解してしまうことはよくある。

日本語にも四字熟語があり、中国語と同形同義のものも比較的多いので、熟語は全般的に日本人学習者にとって決して難解な学習事項ではない。しかし、使用面で観察すると、中国語の成語は書面や口頭を問わず、日本語の四字熟語と比べて、より高い頻度で使用されるといったことを学習者に認識させる必要がある。

既存のテキストでは、「単語」や「語注」の箇所で、例えば「名不副实（成語）－míngbùfùshí－有名無実である」というように表記されるものが主流である。ただ、上述したようなことから、中級レベルのテキストにおいては熟語に関するより詳細な情報を提示することが望ましいと言える。学習者にまず常用される熟語は受容語彙として学習させ、中国語語彙体系において熟語が豊富であることを認識させなければならない。

熟語はいくつかの下位分類ができる。以下に示す慣用語、成語、諺については、その概念もテキストにおける「ポイント」等の部分で解説し、より多くの例を提示するのが良いと思われる。

①惯用语「慣用語」

字面の意味とは異なる意味を示す固定フレーズである。語構成は“开夜车”、“拍马屁”、“炒鱿鱼”、“穿小鞋”などのように三音節で、述目構造を持つものが多い。ただ学習者は慣用語であることを知らなければ、上のような例を「夜に車を運転する」、「馬の尻をたたく」、「イカを炒める」、「小さい靴をはく」と解してしまう傾向にある。また、これらの慣用語は否定的で嘲笑、諷刺、批判、皮肉といった感情義を持つものがほとんどである。反面、肯定や賞賛、評価を示すような文においては一般的に使用されないといった点についても、中級レベルの学習者に対する教育内容として注視したい。

②成语「成語」

『中国成语大辞典(上海教育出版社)』には約 3 万の成語が収録されている。常用されるのは約 3 千余りである[16]が、成語は熟語の中でも数が多い上、使用頻度も高く、中級レベルの学習者には必須の学習項目であると言える。大多数のものが 4 音節であり、古漢語における民話、伝説、史話、寓話などが出所となっているものがほとんどである。中国語の成語の中には、“一举两得”、“半信半疑”、“自力更生”など、日本語の四字熟語と同形同義のものがある。一方、日本語ではほとんど使用されない“车水马龙”、“南腔北调”、“方兴未艾”なども多数ある。テキストにおいては、なるべく後者のタイプの方を提示する方がよい。その他、成語を構成する形態素には、“之”、“如”、“而”、“未”などの古語がよく見られることや、数字を使った“一清二楚”、“三言两语”、“七上八下”，“千真万确”などの成語が多いこと。また成語は単独で使用されるだけではなく、文中において様々な文成分となる、といったことは、学習者の偶発的な学習だけでは気づきにくい点である。とりわけ、成語が状況語や補語となるような“他满面春风地走了进来。”や“现在她弹钢琴已经弹得出神入化了。”[17]などの用例を強調し、学習者に成語の用法の広さを意識付けることも教育内容に加えたい。

③谚语「ことわざ」

長年にわたり民間で伝播し、簡単で通俗的な言い回しにより、深い含蓄のある意味を示すものである。慣用語や成語より長く、文の形をしているものが多い。“家和万事兴”、“情人眼里出西施”、“有理不在言高”など、ことわざの多くは中国人の思想や価値観、歴史、或いは知恵や経験が示されるものである。よって、学習者に多くのことわざを学習させることは中国文化の理解にも繋がる。またことわざは、日常生活における口頭語でも、よく使用されることから、学習者が発信語彙として習得できるような教育方法を考えなければならない。

3-5　語と語の関係について

前述したとおり、中級レベルのテキストでは、課文に出てきた中の重要語や新出語句を順に並べて、それら一つ一つについてピンインと語義を示すという方法が一般的に取られている。この方法は語彙導入の基本的で有効な方法であることは間違いない。ただ、学習者にとって示された語を一つ一つ覚えていくということは、いささか単調な作業であり、語の数が多くなるほど負担感が増していく。語は単体で音韻、形態、意味などの情報を持つだけではなく、単語と単語のネットワークを形成している。このような語彙体系を色濃く明示する形で、テキストにおける語彙の提示方法を構築することが一つの課題であると見なせる。例えば、“凉快”という語を学習する際は、同時に“暖和”、“热”、“冷”という形容詞を提示するケースがあるが、これは語義の観点から体系化を行った結果である。これら四つの語を全く別々に学習するより、まとめて学習者に提示し、覚えてもらう方が効果的であるということは言うまでもない[18]。この他、“凉爽”、“气温”、“秋天”などといった類義語や上位語或いは連想語などと同時に提示する方法も検討可能である。このような語彙の体系性を重視した方法は、既習語彙が一定の数に達している中級レベルの学習者には語彙量を増加させるための不可欠な方法である。よって、中級レベルのテキストにおいてこのような語と語の関係についての情報を提示することが適していると言える。また学習者に対してすべて受身の姿勢で学習させるのではなく、体系性にしたがって語彙を習得し定着させるためのタスクをテキスト内に作成することも一つの方法であると見なせる。

テキストにおいて取り上げることが可能な事項としては次のようなものが考えられる。

①同形語と同音語

標記の事項については、語彙論の観点からは様々な内容が挙げられるが、中級レベルの学習者に対しての教育内容としては二点考えられる。

一つ目は“会”、“站”、“米”、“海口”、“仪表”などの同音同形語の存在である。これらは、同音同形であるが、異なる二つの単語として見なされ、多義語とは区別する必要があるということ。二つ目は、同形異音語についてである。日本語の特徴から、日本人学習者は一つの文字に二つ以上の発音があることに対して違和感は少ない。しかし、特に語義が大きくかけ離れる、“重”、“长”、“还”、“地道”、“精神”のような例[19]に対しては、個別の事例を覚えさせると同時に、ピンイン（発音）によって意味が異なるこれらの同形異音語が中国語の語彙の中に存在するということを教育内容に加えたい。

②類義語と反義語

語義が似ている複数の語に対する弁別は中級レベルの学習者にとっては必須の学習事項である。検定試験や学習書の練習問題においては、この類義語の弁別能力を問うような問題がよく使用されるが、テキストにおいて個別の類義語の弁別や類義語全体に関する知識が明示されることは少ない。一部のテキストにおける各課のポイントの部分では、“还”と“也”、“不”と“没”、“再”と“又”など、虚詞についての類義語の例は見受けられる。ただ、動詞や名詞などの実詞についての類義語の例は非常に少ない。学習者がこれらの区別について知りたい場合は、一般辞書において一部の見出し語に記されている弁別内容と用例から学習するしかないという状況がある[20]。このようなことから、テキストにおいては何らかの形で類義語についての情報を盛り込む必要があると言える。課文の中にあえて何組かの類義語を使用し、文脈や前後のコロケーション等を利用し、それらの類義語の区別を学習させる方法や、「単語」や「語注」の箇所で、類義語を付す方法等が考えられる。また、類義語弁別においては多種多様な弁別法[21]が用いられて区別が示されるが、一般的に弁別法は語義面、文法面、使用面における三つに分けられるといった知識も、学習者にとっては有用性があるのではないかと言える。

また反義語についても、「単語」や「語注」の箇所で、その反義語を付す方法が考えられる。特に、“香－臭”、“贵－便宜”、“骄傲－谦虚” など、形容詞の反義語を示すことは学習者の語彙習得にとって、非常に有用性があるものと見なせる。常用語の中には“高－低、矮”、“瘦－胖、肥”、“深－浅、早、容易”、“清淡－浓郁、油腻、兴隆”というように複数の反義関係が認められるものがある。このことを学習することは多義語の理解にも繋がり、語彙をより体系的に習得することに大きく関わるものと言える。さらに、“高低”、“呼吸”、“内外”、“冷暖”、“进出”、“买卖”、“好歹”といった反義を利用した語構成からなる語があるという語彙論的知識を教えることも可能である。こ

れらの中には日本語と同形同義のものもあるが、日本語の語彙と順が異なるものや無いものを優先的に提示することが効果的である。

③上位語と下位語

語の体系性を注視した語彙学習を考えた場合、もう一つ挙げられるのが上下位語である。例えば、“山脚”、“山腰”、“山顶”はすべて“山”、“粉红”、“枣红”、“鲜红”、“朱红”はすべて“红”という上位語を持つ。このように同じ語を上位語としてもつ語については、テキストにおいて同時に体系的に学べるような工夫があってもよい。また中国語は日本語と比べると動作の描写が細かく、それにより、一つの動作を示す上位語に対して、多くの下位語が存在する傾向にあると言える。例えば、“跑”「走る」を上位語とする“小跑”、“猛跑”、“飞跑”、“慢跑”、“快跑”など。同様に“看”「見る」を上位語とする“盯”、“瞥”、“视”、“见”、“瞧”といった動詞の上下位語をより多く学習することが、表現力の向上に繋がると考えられる。

4　日本語語彙との関係に依拠した考察

4-1　日本語語彙との関係による語彙分類を利用する

日本人学習者の立場から日本語語彙との関係に依拠し、中国語の語彙を分類すると、「同形同義語」、「同形近義語」、「同形異義語」、「異形同義語」の四つのタイプに分けられる[22]。これら四つのタイプをテキストにおいて一律的な扱いをするのではなく、差別化した上で学習者が効率的に語彙を学習できるような方法の考察が可能である。日本人学生の中国語学習者は、語彙学習の面では日本語語彙との関係から、未習段階でもすでにある程度の知識は備えているということが言える。周知の通り、中国語の語彙には、例えば“化学”、“北京”、“民主”、“十二月”、“出版”等、日本語と比べて同形同義の語が存在する。李 2011 によれば、《汉语水平词汇与汉字等级大纲》における“甲级”レベルの 1033 語の中で、基本的に同形同義であると見なすことができる語は 446 であるという統計が示されている。日本人学習者にとって、これらの単語は基本的にピンイン等の発音学習をするだけで、おおよそ習得したと見なすことができる。その分、テキストにおいてはこのタイプの単語の情報量を減少させることが可能である。「同形異義語」、「異形同義語」[23] に対しては、日本人学習者は英語など他の外国語の単語を覚えるのと同様、ほぼ零からの学習になる。テキストにおいては、ワーク形式を用いるなど、「語形－ピンイン－語義」をセットで覚えられるような工夫が必要である。中級レベルの語彙学習に関して、最も注意しなければならないのは「同形近義語」である。日本人学習者は他の母国語を持つ学習者と比べて、とりわけ語彙習得については有利であるということがしばし言われる。ただ、反面このタイプの語彙については、日本語の語義で解読したり、使用してしまうというマイナスの面も見られる。特に発信語彙の面で、日本語の語彙をそのまま転用することから生ずる誤用が数多く見受けられる。例えば、“*我提出了毕业论文。”「私は卒業論文を提出した。」、“*我看了大学入试合格发表的时候,很高兴。”「私は大学入試の合格発表を見た時、とても嬉しかった。」[24]、といった誤用はよく見られる。前者は中国語の動詞“提出”は日本語の「提出（する）」と「同形同義語」と解してしまっていることが原因であると判別できる。また後者の例は、「大学入試合格発表」という中国語をどう表現するのか知らず、そのまま日本語のそれに当たる語を転用したことが原因であると判別できる。テキストにおいては何らかの形で、この「同形近義語」の存在を強調しなければならない。そして、学習者に対して、まずこのタイプの語彙が中国語においては比較的多い、ということを意識付けた上で、間違えやすいより多くの例を提示することが必要であると考えられる。

4-2　文化義を示す

言語の学習は半ばその文化の学習であり、特に中級レベルの学習においては、この点が顕著である。前章でも少し述べたが、課文に出てきた語釈において、語の文化義まで記述して学習者に示すテキストは多くない。例えば、“饺子”について、「饺子－jiǎozi－ギョーザ」というように示すだけでは、“饺子”という語を学習させたことにはならない。「水ギョーザ」、「年越し」、「一家団欒」、「主食」といった文化義も示し、日本語の「ギョーザ」がもつ「食堂」、「一人前」、「焼きギョーザ」、「ラーメンの副食」といった文化義との相違を学習者に認識させてはじめて、

理解させたと言うことができよう。同様に、“阿姨”を「阿姨－Āyí－おばさん」、“春运” を「春运－Chūnyùn－旧正月の交通ラッシュ」、“AA 制”を「AA 制－AAzhì－割り勘」といった例についても同様に、表記外の文化義を知ってこそ、本当に語を習得したと見なすことができる。最近出版されているテキストにおける課文では、中国の文化を題材にした内容が比較的多く見られ、学習者は課文を読むことで中国文化の諸相を知ることができる。ただ語レベルにおいても、ある一部の語彙については注視すべき文化義がある。語彙学習において、「語形－ピンイン－訳語」に加えて、文化義を知る必要があることを学習者に意識付けなければならない。テキストにおいては、どのような形で、これらの文化義を提示するかということが課題になる。一例を示すに過ぎないが、日本人学習者にとって学習すべき語レベルの文化義としては、中国文化の特徴が強く示される“同学”、“串门”、“有道理”、“十一国庆”、“单位”、“小皇帝”などの語が挙げられる。その他、上に挙げた“饺子”のように日本語と語義は近いが、異なる文化義を持つ、“农村”、“五一节”、“牛”、“红色”、“独生子女”、“放鞭爆”などの語も対象となり得る。

大学の授業用のテキストでは、各課の最後のコラムでこれらの語を取り上げ、語の文化義やそれに伴うコミュニケーション文化を紹介しているものが多く見られる。筆者は授業において、よくこのようなコラムを学生に読ませて、内容的に補足し、写真を見せたりして、文化についてある程度の時間を割いて説明する。しかし、筆者の経験からすると受講者の反応はもう一つである。テキストにおけるコラムとして扱われていると、授業の本題ではなく、余談として受け取ってしまう傾向にあり、受講者である学生はその重要性を認識できないようである。

まず、中級レベルのテキストにおいて、どのような語のどういった文化義を取り上げるのか。また単一的ではなく、ある程度体系的に語の文化義を提示する方法を考案しなければならない。その上で、コラムのような副次的な扱いではなく、どのような形でこれらの文化義をテキストに組み込むのかといったことが課題として考えられる。

4-3　日本における中国語の使用に応じた語彙の提示

大学で外国語として中国語の授業を履修する学習者が、どういった場面で学習した中国語を使用するのであろうか。このことを考察すると、留学や旅行時の中国における使用の他、日本国内での使用が多いことが分かる。したがって、学習者の日常における中国語の表現力を高めることが課題の一つとして挙げられる。具体的に言えば、同じ大学の中国人留学生との会話や、バイト先の中国人の知り合いと話すといった機会を持つ学生が多い。中国語の常用語彙として選定され、テキストにおいて取り上げられるのは、中国の日常生活において使用される語であることが多い。ただ、上述した状況を考慮するなら、日本人学生の日常生活や学校生活で常用される日本語の語句に相当する中国語の語句をより多くテキスト内に提示する必要性が認められる。この中には、日本文化特有の概念を示す「花見」、「花火大会」、「温泉旅行」、「パチンコ」、「コンビニ弁当」、また概念自体が中国において認識することが難しい「飲み会」、「ファミレス」、「KY」、「ひま電」、「立ち食いそば」、「忘年会」といった語が挙げられる。さらに、日本の大学生活に関わる語として常用される「ゼミ」、「就活」、「サークル」、「学祭」、「生協」、「代返」、「レポート」、「楽勝科目」などの語も、学習者が学校における日常会話を中国語に置き換えて発話するということを考慮すれば、必須の語として扱われるべきであろう。これらの語は日中辞典を調べても出てこないケースがほとんどである。よって、学習者はテキストに示されていなければ、授業を担当する教員や留学生の友達に直接尋ねるしかないという現状がある。このタイプの日本語に相当する中国語の語や表現を知っているか否かということが、上述したような場面における中国語の発話力（表現力）に大きく関わってくることを注視したい。

5　まとめ

以上、本稿では語彙を中心とした大学外国語授業用の中級レベルテキスト作成を目的とした、語彙教育についての初歩的な考察を行った。本稿での考察はテキスト作成に際しての、前段階におけるものであると位置づけられる。本稿で謂うテキストは語彙論そのものを教えるものではなく、あくまで大学の外国語授業において使用される、総合力の向上を目指す一般的なテキストである。したがって、本稿の 3 章や 4 章で述べた点をすべてにわたり、テキストに取り入れるのは量的に不可能である。この中から、さらに学習者にとって必要であると判断できる事項を精

査した後、テキスト内に提示する内容の考察が、今後の研究課題であると認識している。また、本稿で調査したテキストはわずか 15 部にすぎないが、今後は研究を進める過程で、中国で出版される対外漢語教育用のものも含めて、さらに多くのテキストを調査の対象にしなければならない。

本研究は新しいタイプの教材作成を試みるものであるが、大学の授業用のテキストである点を考慮すれば、従来のテキストをあまりにも大きく変化させてしまうのは適切ではないと言える。従来のテキストの形式、つまり、「課文－語注－ポイント－練習問題」という編成は出来るだけ保持した上で、効率的に語彙に関する情報を盛り込むことを検討している。現時点では、テキスト各課における語注とポイントの部分に 3 章や 4 章で述べたような語彙に関する情報や事項を、直接的或いは間接的に導入し、提示することを企図している。

本稿に関する課題については、無論語彙を中心としたテキストによる学習及び語彙論的知識を増やすことがどういう形で学習者の総合的な語学力の向上に結び付けられるのか、という問題が生ずる。さらに研究を進める過程で、この問題を解決するためには、理論的な枠組みからの考察が不可欠である。今後は英語教育や日本語教育に関する語彙教育の事例なども参照し研究を進めたい。

（注）

1）吴 2005:141 を参照。

2）詳細については輿水 2005:121 を参照。

3）本稿で言う「中級レベル」とは、大学一年次の初習段階を終了した二年次以上の授業のレベルを想定するものである。

4）調査したテキストは以下の 15 部である。『中級漢語 2』白帝社、『北京の明子』白帝社、『実力のつく中国語』白帝社、『グループ方式で学ぶ中国語中級編―日本と中国』東方書店、『听听说说』白帝社、『中文大世界』白帝社、『総合中級中国語教程』白帝社、『大学生のための現代中国 12 話Ⅱ』白帝社、『中国見たり聞いたり 15 章』光生館、『中国ってこんな国！』朝日出版社、『中国を語る―文化と生活―』金星堂、『焦点中国』白帝社、『メグの中国ホームステイ』同学社、『心に残る中国語』金星堂、『自分のことばで中国語』光生館

5）このほか「語句のヒント」、「重要語句」、“词语”という名称が使用されている。また一部のテキストではこれらの語彙情報が全く記されていない。

6）初級のテキストでは初出の単語、中級レベルのテキストでは、課文の読解に対して必要な語、或いは重要語句や特殊語彙を挙げるのが一般的である。

7）本章においては、全般的に万 2000、符 2008、卢 2007、万 2010、高 2008 などを参照。

8）語彙教育における形態素の重要性については輿水 2009:127 に「日本人の中国語学習で語彙力の増強に、漢字の知識を有効に使うとすれば、漢語の語構成を十分に把握し、生産性の高い形態素を核として連鎖式に大量の理解語彙を作ることが望ましい」という指摘がある。

9）輿水 2009:11 を参照。

10）接辞についての語彙教育に関しては王 2001:424 において詳しく記されている。

11）受容語彙に対する用語で、主に「ライティング」や「スピーキング」において必要に応じて使える状態にある単語を指す。

12）前述した“汉语水平词汇与汉字等级大纲”においてはこれらの特殊語彙が収録されているが、甲、乙レベルにおいては少ない。

13）この類の新語については、特に経済学部などの社会学系の学部に所属し、専門外の第二外国語として中国語を学習する学生にとっては重要であると言える。このように、大学の中級レベルの授業は、学生の専攻を踏まえ、専門教育との関連性をも見据えながら、内容を定めることが今後の専門外の外国語教育の課題の一つであると考えている。

14）新語を課文のタイトルにしているテキストはよく見られる。

15）この中には、“啤酒”、“信用卡”、“摩托车”、“高尔夫球”などの「意訳＋音訳」の外来語もある。

16）万 2010:92 を参照。

17）万 2010:139 より引用した。

18）この点に関しては、門田他 2006:13、145、望月他 2003: 75 を参照。

19）同形異音語の中には、“转”、“落”、“处”、“血”など語義の差がわずかである類がある。

20）日本で出版されている類義語の学習書には、『類義語のニュアンス 2 』荒川清秀他著、東方書店 2000 年。『どう違う？例文で覚える中国語類義語 1000』平山邦彦監修、アスク 2010 年などがある。

21）類義語の弁別法については浅野 2011 を参照。

22）この四つの分類については王 2008:112 を参照。

23）この二つの類の語彙については魯 2001 に詳しい。
24）作文例の作者は、筆者が本務校で担当する二年生以上を対象とした授業の受講者（学習歴約一年半）である。

【主要参考文献】

胡明扬 1997〈对外汉语教学中语汇教学的若干问题〉《语言文字应用》第一期
吴丽君他著、西川和男編 2005『中国語の誤用分析―日本人学習者の場合―』関西大学出版部
輿水優 2005『中国語の教え方・学び方―中国語科教育法概説』富山房インターナショナル
輿水優、島田亜美 2009『中国語分かる文法』大修館書店
陳昭宜 2008『中級漢語 2』白帝社
荒川清秀、羅京莉 1999『北京の明子』白帝社
楊凱栄、張麗群 2002『実力のつく中国語』白帝社
馮誼光、王柯、石原享一 2003『グループ方式で学ぶ中国語中級編―日本と中国』東方書店
洪潔清、劉鄉英 2004『听听说说』白帝社
王曙光 2000『中文大世界』白帝社
上野恵司監修 2007『総合中級中国語教程』白帝社
黄漢青、杉野元子 2006『大学生のための現代中国 12 話Ⅱ』白帝社
荒川清秀、周閲 2003『中国見たり聞いたり 15 章』光生館
池上貞子、張国璐 2008『中国ってこんな国！』朝日出版社
山下輝彦、蘇英霞 2008『中国を語る―文化と生活―』金星堂
植屋高史、鄭偉、谷川栄子、阿古智子、砂岡和子 2011『焦点中国』白帝社
守屋宏則、陳淑海、劉光赤 2006『メグの中国ホームステイ』同学社
関西大学中国語教材研究会 2006『心に残る中国語』金星堂
大西博子、魏穂、大東和重 2008『自分のことばで中国語』光生館
王顺洪 2001〈中日汉字词缀比较－兼谈对日本留学生汉语词汇教学〉《对日汉语教学国际研讨会文集》中国社会科学出版社
万艺玲 2010《汉语词汇教学》北京语言大学出版社
門田修平、池村大一郎 2006『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店
望月正道、相澤一美、投野由紀夫 2003『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店
浅野雅樹 2011「類義語をどのように教えるか　―弁別法の使用を中心に―」『中国語教育』第 9 号
王顺洪 2008《日本人汉语学习研究》北京大学出版社
鲁宝元 2001〈汉日同义异形词的对比考察与对日汉语教学〉《对日汉语教学国际研讨会文集》中国社会科学出版社
高燕 2008《对外汉语词汇教学》华东师范大学出版社
卢英顺 2007《现代汉语语汇学》复旦大学出版社
符准青 2008《现代汉语词汇(增订本)》北京大学出版社
万艺玲 2000《汉语词汇教程》北京语言大学出版社
李冰 2011〈词形影响日本学生汉语词汇习得的实证研究〉《语言教学与研究》第五期

本研究は科研費若手研究Ｂ（23530242）の助成を受けたものである。